

序文 「別情歌」発見のショック

この詩集は奇妙な詩集です。書いたのは六十六年も昔、昭和二十一年（1946、終戦の翌年、私は25歳）の三月末から四月の初旬の数日間。書いたのは私ですが、一字一句の修正なしで、誰かの口移しで書かされたものです。詩は文語体の長編詩。でも詩の舞台（詩の内容が示す状況）は江戸時代らしい。つまり文体も、詩の状況も、西欧の newer 詩発生（明治十五年）以前のもの。いったい作者は誰なのか？ 私は（詩霊甦へりて詩へる）と、プロローグの劈頭の詩「光ある珠」に断り書きを付けている。これが当時の私の実感だった。

内容はある男の悲恋の一生。そこに至る経緯、その後の人生、そして深いその時その時の悲愁を物語る。物語りは短詩型（和歌・俳諧）では出来ないもので、文語体長編詩になったのだろう。相手の女性はお春。これを書いてからほぼ10日後の四月十五日に私は現在の妻瑠理子と結婚した。読み終わって（書き終えて）から、これはもしかしたら、妻と私の前世のようなものかしらと思った。特に、これまでその記憶らしいものは断片すらなかったのだが。実感としては否定できなかった。心の秘密というより、人生の不思議、いや詩の不思議ともいえる。だから、私はこの本を秘匿した。妻にも誰に

も見せずに、ひそかに手造りで清書してささやかな一巻の詩集とし、以後封印した。

だが、それが露見した。六十六年後（2011年12月）、台風15号で屋根をやられたので、自宅を壊し新築することになった。その転宅騒ぎの荷物の古い行李の中から、この詩集が顔を出した。まさに露見。思いも寄らぬ、六十六年ぶりの対面に不思議な懐かしさも憶えながら、今にも壊れそうな手造りの詩集をめぐりつつ、私は落雷のショックを受けた。

「自序」（詩集の序文として書いたもの、但し本書では巻末に収録）

これは私自身が六十六年前に自分の頭で（自分の思想で）自分の手で書いたもの。だが、何とこれは、私が今書けばこう書く筈のもの。

こうしか書けないもの。人に進歩は無いのか。現に、私は昨年『愛のことだま』という、言霊論に関する本を出した。この本の序章「いのちと美、人の進化のためにある揺れる吊り橋」、これは六十六年前の「自序」と寸分変わらぬ立場に立ちつつ、多少現代人向けに書いたもの。本質はことだまによる芸術革命、大袈裟に言えば文明革命論だ。

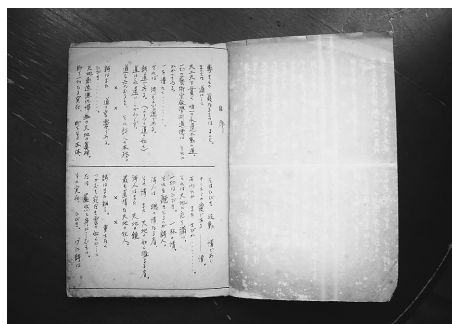
人は六十六年間変わらぬ、本質的なものは。これが私の受けたショック。人の一生は一つの課題を背負って歩く一匹の光の蟻なのか。そして、もし詩神とか詩霊とかいうものがあるとすれば、前生に



もかかわる縁えんなのか、その人の妻の人生ともかかわり合あわせている、何かなのだろうか。

「人生不可解」、それだけではすまされない深淵が人間にある。このショック、落雷感が拭い切れないので、このボロけた詩集をアリのままに活字にすることにした。台風さん、九十一歳になつてから自宅の建て替え、思わぬ出来事で、この秘匿されていた詩集が世に顔を出すことになりました。まさしく六十六年ぶりの「コンニチワ」ですね。

2012・1・4 記



山波言太郎

(本名・桑原啓善)